

# 唯物論研究協会創立 40 周年企画

## 「唯物論研究の変遷と現代の課題」

### 趣意書

唯物論研究協会は、1978年に設立され、今年でちょうど40年目にあたります。戦前からの唯物論研究会の伝統も踏まえつつ、戦後各地で形成された唯物論研究会（札幌唯研、東京唯研、名古屋哲学研究会、関西唯研など）を横断するかたちで、全国的な研究組織として出発しました。

78年の第1回の研究大会とシンポジウム（法政大）から昨年の大会とシンポジウム（立教大）の第39回まで、さまざまなテーマを掲げて毎年開催されてきました。機関誌としては、それ以前からあった『唯物論』（1973年創刊）を引き継ぐかたちで、『唯物論研究』（1979年創刊、年2回発行）が刊行され、1984年までに11号となりました。1985年からは『思想と現代』とタイトルを変え、時代の変化にも対応するため季刊となり、1995年までに40号を刊行しました。1996年からは、『唯物論研究年誌』として年1回の発行となり、2016年現在21号が刊行されています。

会員の構成も、当初は、哲学・思想系、人文・社会系、自然系とそれぞれの分野を専門とする研究者が集まる学際的な研究団体として出発しましたが、現在では、哲学系や自然系の分野よりも、社会科学系の研究者が多く参加されている印象があります。また、若手研究者が参加しやすいよう、さまざまな取り組みの結果、大学院生や若手研究者が比較的多いことも特徴となっています。

会則では第3条で「この会は唯物論の研究の発展と交流をはかることを目的とする」という簡潔な文言だけでしたが、2002年より「この会は唯物論の研究および現代の社会と文化に関する批判的研究の発展と交流を目的とする」と改められ、唯物論研究のみならず、より明確に、「現代社会と文化」を対象とした批判理論の構築が課題となったのでした。

このように、唯物論研究とはいっても、どのような問題を課題として位置づけるか、40年間のあいだに時代の節目ごとに変遷してきたといえます。今回のプレ企画においては、唯物論研究協会の変遷を、便宜的に3つの時期（78年～80年代、90年代、2000年代）に分けて区分し、それぞれに対応するよう、以下のようにテーマを設定します。

- (1) 市民と階級（1970年代～80年代）
- (2) 社会主義の崩壊とその理念（1990年代）
- (3) 新自由主義の台頭と浸透（2000年代～現在）
- (4) 教育と文化の変容

国際的な情勢から日本社会の変容まで、さまざまな出来事をトピックとしながら、思想や社会研究の課題が、どのように提起されてきたのか、多角的に検討できる場を共有したいと考えています。

## 各報告要旨

### (1) 市民と階級（70年代～80年代）

唯研草創期（1978～89年）の市民社会と階級（小池直人）

報告者は、1978年当初から唯研に参加していたわけではないが、この時期は戦後社会の枠組の大転換の前夜であり、会員の研究関心も質的ともいえる転換の必要を自覚しはじめた時代と思える。はたして、唯研は自由闊達に議論する研究団体として、懐疑と批判を複雑なかたちで展開し、戦後（思想）の亀裂を確認し、あらたな時代を模索した。ソ連型マルクス主義の行き詰まり、労働運動の停滞と衰退、市民社会のブルジョワ化などとともに、エコロジーやフェミニズム、新社会運動、ペレストロイカ、ポストモダニズム、日本型経営など、新思想の萌芽がいつせいに芽吹いた。数えきれないほどのトピックがあったし、唯研（とくに『思想と現代』誌）の歩みはそれらの問題への果敢なチャレンジであった。だが、今日から見て当時の新しい要素がそのまま維持されたとはとうていえない。まだ新自由主義はごく萌芽的に議論されていたにすぎない。この報告では、この「前夜」の時代における階級と市民社会等をめぐる議論を中心に、どのような視点が継続されて遺産となり、何がポテンシャルを喪失したのか、報告者の視点から考えて見たい。

### (2) 社会主義の崩壊とその理念（1990年代）

全国唯研とソ連崩壊（後藤道夫）

全国唯研は、社会科学・人文科学領域の左派系の諸学会のなかで、1989年から91年末にかけての既存社会主義崩壊による思想的ダメージが最も少なかった部類にはいる。報告では、それはなぜか、「崩壊」にいたる1980年代、さらにはその前提となる1970年代には、どのような議論と思想形成の努力が行われていたのか、それらは全国唯研がいわば「新自由主義批判のアゴラ」となっている現在とどうつながるのか、考えたい。

### (3) 新自由主義の台頭と浸透（2000 年代～現在）

新自由主義批判とその射程（蓑輪明子）

1990 年代半ば以降、日本においても新自由主義改革が行われ、政治や社会のあり方が大きく変容し、生活・文化も大変動を遂げた。唯物論研究協会では、機関誌や『ラジカルに哲学する』シリーズなどで、いち早く、新自由主義改革の構造の解明と思想的批判を行ってきた。これらの言論活動は、新自由主義の政治と社会に対する正確な認識を培うために役立ったとともに、新自由主義がもたらす問題に立ち向かうための言論活動や運動を立ち上げる上でも、相当程度に重要な役割を果たした。私自身も大きく影響を受けた一人である。本報告では、唯研会員によって行われた新自由主義分析とその批判を振り返るとともに、それが果たした意義、および 2017 年における新自由主義批判の課題を探ってみたい。

### (4) 教育と文化の変容

イデオロギー批判から文化の批判、文化の政治学へ（豊泉周治）

「教育と文化の変容」というテーマで全国唯研の 40 年をふり返るという課題をいただいた。他の三つのテーマには概ねの時期区分が付されているが、このテーマにはない。創設の当初から文化や教育は重要なテーマだったからである。だが、1990 年を前後する時期、やはり論じ方は変わったと思う。もっぱら唯研を通して研究活動の指針を見いだしてきた私の個人的経験に即して、タイトルのような変化に着目して、報告を行いたいと思う。